

臨城道中作

臨城道中の作

紹聖元年（一〇九四）五十九歳 閏四月、定州をあとに英州への旅路につき、臨城を過つて作る。

予初赴中山 連日風埃 未嘗了了見太行也 今將適嶺表 頗以是爲恨 過  
臨城內邱 天氣忽清徹 西望太行 草木可數 岡巒北走 崖谷秀傑 忽悟  
嘆曰 吾南遷其速返乎 退之衡山之祥也 書以付邁使志之

予初め中山に赴く 連日風埃 未だ嘗て了了 太行を見ざるなり 今將に嶺表  
に頗る是を以つて恨と爲す 臨城內邱を過ぐ 天氣忽ち清徹 西のかた太行  
を望めば 草木數ふ可く 岡巒北走し 崖谷秀傑なり 忽ち悟り嘆じて曰く  
吾南遷するも其れ速に返らむか 退之が衡山の祥なり 書して以て邁に付し  
之を志さしむ

【語釈】○中山：定州のこと。○了：了然。あきらか。○太行：太行山。華北の大平原の西側に北から南へ六百キロにわたる山脈。○嶺表：嶺南。五嶺の南、広東・広西の地。○頗：かなりな程度をあらわす。○臨城：定州の西南一百里。河北省臨城県。○内邱：臨城のすぐ南。○清徹：澄んですきとおっていること。○岡巒：岡と山。巒はまるい山。○退之衡山之祥：退之は韓愈の字。衡山は五岳の一の南岳。湖南省にある。韓愈に衡嶽廟に謁する詩がある。○付邁：長子の邁にわたす、あたえる。○使志之：よく覚えておかせた。

逐客何人著眼看 逐客何人か眼を著けて看る

太行千里送征鞍 太行千里 征鞍を送る

未應愚谷能留柳 未だ応に愚谷能く柳を留むべからず

何獨衡山解識韓 何ぞ独り衡山解く韓を識るのみならむや

【解釈】放逐の身となって旅する私などには、たれ一人目をくれる人もないが、太行の山々は、千里に亘ってどこまでもわが旅の鞍を送って来てくれる。柳宗元の名づけた愚谷が彼を永州に引き止めたほどには、（嶺南の地は）わたくしを長くは引き止めはしないであろう。（なぜなら：かの衡山は韓愈を見知っていて、たちまちに晴れ上がったというが：いま太行山がわたくしにその全容を見せてくれているではないか。）どうして衡山が韓愈を身知っているだけであろうか。

○愚谷：柳宗元は永州（湖南省零陵県）に謫せられた。永州 瀟水ほとりで、この溪を愛し、愚公谷の名を愚溪と改めたという（愚溪詩序）。